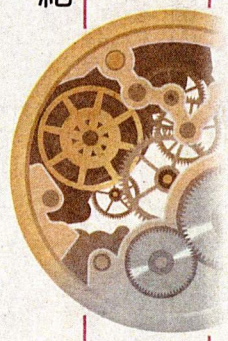
越境精神

梅棹忠夫の残したもの 15

小長谷　有紀



小松左京氏

「日本沈没」のモデルに

去る7月26日、小松左京が80歳で亡くなった。梅棹忠夫の10歳年下で、1960年代後半から、人類の未来をともに考えた盟友の1人である。

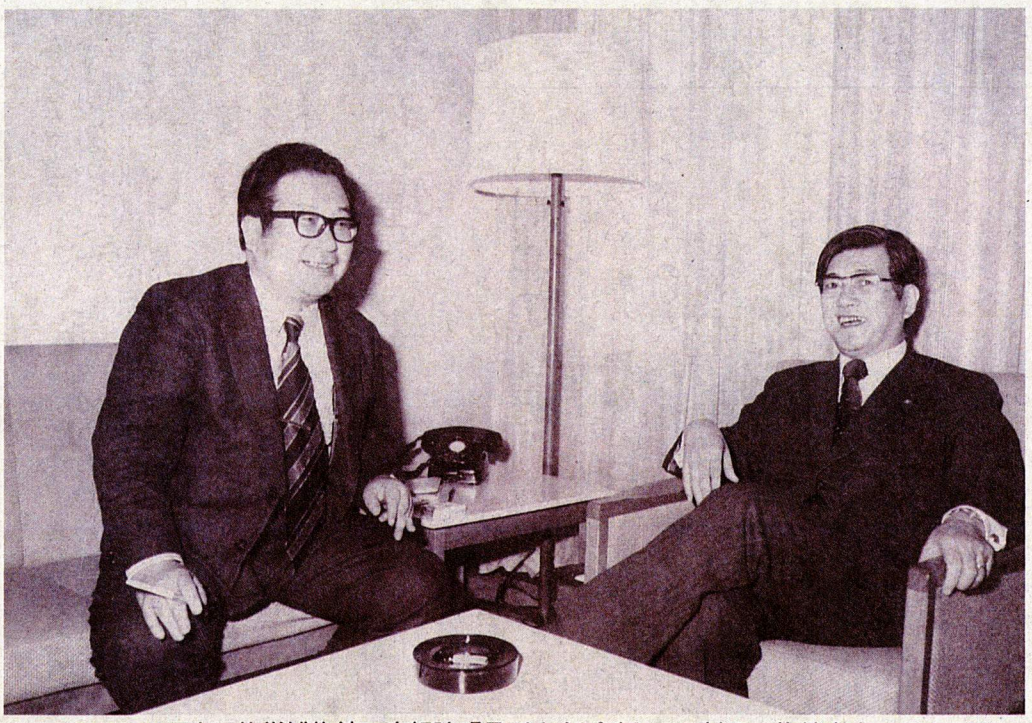
昭和39年に東京オリンピックが開催されたとき、つぎは大阪で万国博覧会が開催されるかもしれないという話が伝わってきた。

梅棹の自伝『行為と妄想』によれば、「これはなにかおもしろいことがやれそうだ」と、林雄二郎、川添登、加藤秀俊、小松左京らと5人で「万国博をかんがえる会」をつくった。当時、林は経済企画庁経済研究所所長、川添は評論家、加藤は京大助教授、小松は売り出し中のSF作家だった。

会の別名は「かいくうかい（貝食う会）」。鳥羽や志摩で海産物に舌鼓を打ったからである。会話の中身もさぞや盛りだくさんだったろう。

梅棹と小松は加藤も加えて3人で、昭和41年、カナダのモントリオールへ出かけた。開幕直前の万博会場を見学し、万博が「壮大な文明の祭典」であると体得した。

その後、梅棹は万博の意義を語る際、「万国博の建築は全部情報建築だ」という小松のセリフをわざわざ引用しながら、実用的価値のないことがよいという説明を展開している。梅棹の「情報産業論」をもっとも深く理解した1人として小松が身近にいたのではないだろうか。



国立民族学博物館の広報誌『月刊みんぱく』の取材で、梅棹忠夫氏と対談する小松左京氏（左）　＝大阪府吹田市、昭和52年撮影

小松の作品に登場する梅棹らしき人物は常識を越えた大物ぶりを発揮する。

たとえば『日本沈没』では、日本人の移住計画の策定を政府から依頼される福原教授こそは、梅棹をモデルにしたキャラクターであった。

比較文明史を専門とする福原は、「長期にわたる大きな問題をつきつめて考える」ことのできる、「本当の学者」だという設定だ。そして、わざわざ京都まで依頼に来られても教授は「えらいこっちゃな…」とつぶやいて寝てしまう。いざ泊まり込みで作業が始まっても「茶をすすりながら、庭木の話をしたり、茶器のことを話したり、のんびり雑談をしているだけ」にしか見えない。

けれども、げっそり痩せるまで精根を使い果たして、ついに3つの案を完成させる。まとまって移住する、分散する、どこにも行かないの3つ。3つめは、日本人ならではの行動様式として提示された。

放射能汚染のもとで生きなければならない今日、梅棹ならば、ふるさと志向をむしろ日本人の問題点とみなして、常識や情緒にとらわれることなく、鋭く指摘してみせたに違いない。

（国立民族学博物館教授）

スイ特別で招待会　関西最大級のピアノ